イエスの死を記述する物語

－“闇”及び“最後の叫び”の表象を巡って－

土　居　由　美

1．はじめに

キリスト教は、実在したナザレのイエスという一人の人物にその発祥の起点を置く。しかし、その発祥の過程はいささかも単純ではない。実在したイエスは、比較的短期間の公的活動の後、その帰結として紀元 1 世紀のローマ帝国属州ユダヤにおいて十字架刑による死を遂げた。このような形で幕を閉じたイエスの生涯の結末は、彼に希望を託して歩みを共にしてきた者達にとってほぼ完全なる意味不明の謎、絶望と苦痛に満ちた出来事であった。それ故、イエスと共に歩んだ者達は当初、この意味不明の絶望的出来事の前に逃亡した。しかしながら同時に彼らは、その「謎」の中で苦しみ抜き、なおイエスの死の意味を問い続けたに相違ないと考えられる(1)。そのような過程を経て彼らによって解釈されたイエスの死への意味付けが、およそ一世代を経てやがてイエスの死と生を語る物語を形成し、更に後のキリスト教成立の過程へと繋がっていった。

このように、キリスト教の発祥は生前のイエス自身の言行にその根拠を据えながらも、残された者達によるイエスの生と死に対する解釈行為そのもの、即ち彼らがイエスの生と死を解釈し受容したその過程に重要な基盤を置くといえる。

本稿においては、イエスの生涯を物語形式で記述する新約聖書に収められた福音書と呼ばれる四つの文書中の三つ、共観福音書に描写された叙述においてその死がどのように解釈されているのかということを、イエスの死前後の“闇”及び“最後の叫び”の表象を巡って明らかにしてみたい。

(1)　大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2003 217-233 参照。

2. テクスト

諸福音書は、紀元１世紀に幾層もの編集段階を経て成立した文書である[(2)]。その編集段階の詳細な分析に拠れば、研究者により物語各部について完全な見解の一致を見るわけではないものの、諸福音書はいずれにせよ伝承の最古層、比較的古い伝承の層、前福音書の層、福音書著者に拠る編集層の諸段階に区分される。本稿においては紙幅の都合上その細かい分析に立ち入ることは出来ない故に結論のみ述べれば、福音書におけるイエスの死前後の記述は、最古の福音書マルコ及びそれを資料として用いたマタイ、ルカまた独自の伝承に基づいて記述したヨハネ其々の福音書において、編集句であると見なされる[(3)]。

このような各福音書及びその前段階に編集されたと見なされる比較的新しい編集層には通常、出来事そのものよりもその出来事に対する解釈及び意味づけが色濃く表現されることが多い。それ故、当該編集部の分析は本稿の目的にとって有益である。

以下に新約聖書四福音書（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ）のテクストから、イエスの死の場面を記述する物語部を引用する[(4)]。

A. マルコ福音書 15:33-39

15:33　さて、第六刻になると闇が全地を襲い、第九刻におよんだ。

15:34　そして第九刻に、イエスは大声で叫んだ、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」。これは訳せば、わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのか、という意味である。

15:35　すると、かたわらに立っていたもののうち何人かが、これを聞いて言い出した、「見ろ、エリヤを呼んで」いるぞ」。

15:36　そこである者が走って行き、[そして]海綿を酢で一杯にした後、葦〔の先〕につけ、彼に飲まそうとして言った、「エリヤがこいつを降ろしにやって来るかどうか、見てやろうではないか」。

---

(2)　その成立年代は、諸説から最も蓋然性の高い仮説に拠れば、紀元 70 年初頭から半ばに最古の福音書マルコ、次いで 80 年代にマタイ、ルカ両福音書、最後に 90 年代にヨハネ福音書が成立したものと想定される。

(3)　Reinbold W., *Der älteste Bericht über den Tod Jesu*, Hrsg. Von Erich Gräßer Band 69, Walter de Gruyter/Berlin/New York,1994 参照。

(4)　引用は新約聖書翻訳委員会『新約聖書福音書』岩波書店 1996 による。

15:37　しかし、イエスは大声を放って息絶えた。

15:38　すると、神殿の幕が上から下まで、真っ二つに裂けた。

15:39　また、彼に向かい合って立っていた百人隊長は、彼がこのようにして息絶えたのを見て言った、「ほんとうに、この人間こそ、神の子だった」。

B. マタイ福音書 27:45-46

27:45　さて、第六刻から、闇が地のすべてを襲い、第九刻に及んだ。

27:46　また、第九刻頃に、イエスは大声を上げて叫び、言った、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。これは、わが神よ、わが神よ、なぜ私をお見捨てになったのか、という意味である。

27:47　そこで、そこに立っていた者のうち何人かが、これを聞いて言い出した、「こいつはエリヤを呼んでいるぞ」。

27:48　すると、すぐさま彼らの一人が走って行き、そして海綿をとって酢で満たした後、葦〔の先〕につけ、彼に飲まそうとした。

27:49　しかし他の者たちが言った、「やめろ。エリヤがやって来てこいつを救うかどうか、見てやることにしよう」。

27:50　しかしイエスは、再び大声で叫びながら、息を引き取った。

27:51　すると見よ、神殿の幕が上から下まで裂けて、真っ二つになった。そして大地は震え、岩々が裂けた。

27:52　そしてまた、〔さまざまな〕墓が開き、眠っていた聖人たちの多くの体が起こされた。

27:53　そして彼らは、イエスの甦りの後、墓から出て聖徒に入り、多くの人に現れた。

27:54　また、百人隊長と、彼と共にイエスを見張っていた者たちとは、地震と〔さまざまの〕出来事とを見てはなはだしく恐れ、言った、「ほんとうに、この者は神の子であった」。

C. ルカ福音書 23:44-47

23:44　さて、すでにほぼ第六刻になった。すると闇が全地を襲い、第九刻に及んだ。

23:45　太陽が光を失ったのである。また、神殿の幕が真中から裂けた。

23:46　するとイエスは、大声をあげて言った、「父よ、あなたの両手に、私の霊を委ねます」。そしてこれを言った後、彼は息絶えた。

23:47　また、百人隊長は、起こったことを見て、神を賛美して言った、「まことに、この人間こそ、義人だった」。

D. ヨハネ福音書 19:28-30

19:28　この後、イエスは聖書が成就されるためには、すでに万事が成し遂げられたことがわかったので言う、「渇く」。

19:29 酢を満たした器が置いてあった。それで、〔人々は〕その酢をたっぷり含ませた海綿をヒソプの枝に巻きつけて、彼の口のところに差し出した。

19:30 酢を受けれるとイエスは「成し遂げられた」と言った。そして、頭を傾け、雲を引き渡し〔て息を引きとっ〕た。

3．イエスの死直前の“闇”の表象

ここでは、上記当該テクスト部から、共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ）に描かれるイエスの死の直前の“闇”の表象について注釈を施し、その解釈について要約する。以下にそのギリシア語原文と日本語訳とを記す。（網掛けは筆者による。）

Mk 15:33	Καὶ γενομένης ὥρας ἕκτης σκότος ἐγένετο ἐφ᾽ ὅλην τὴν γῆν ἕως ὥρας ἐνάτης. さて、第六刻になると闇が全地を襲い、第九刻におよんだ。
Mt 27:45	Ἀπὸ δὲ ἕκτης ὥρας σκότος ἐγένετο ἐπὶ πᾶσαν τὴν γῆν ἕως ὥρας ἐνάτης. さて、第六刻から、闇が地のすべてを襲い、第九刻に及んだ。
Lk 23:44	Καὶ ἦν ἤδη ὡσει ὥρα ἕκτη καὶ σκότος ἐγένετο ἐφ᾽ ὅλην τὴν γῆν ἕως ὥρας ἐνάτης. さて、すでにほぼ第六刻になった。すると闇が全地を襲い、第九刻に及んだ。
45	τοῦ ἡλίου ἐκλιπόντος, ἐσχίσθη δὲ τὸ καταπέτασμα τοῦ ναοῦ μέσον 太陽が光を失ったのである。また、神殿の幕が真中から裂けた。
Jh	——

(1) 共観福音書に共通する“闇”の描写

上記テクスト引用部に見られるように、マルコ、マタイ、ルカの共観福音書において、イエスが死にゆく場面は「全地を覆う“闇”」の記述によって始められ、この“闇”はイエスの死の瞬間まで継続する。自然の状況描写を背景とするこの記述は一般的見地から言えば(5)、極めて特徴を帯びている。何故なら、イエスの死の時刻は当時の当該地域の表象に拠り第六刻と記されており、第六刻は昼12時、第九刻は午後3時を示す故(6)、この時刻に辺りは明るいのが通常である。即ち、日中の明るさの中、イエスの死の直前に突如全地が闇に覆われるという情景がここで描かれる。日中におけるこのような闇の描写は、単純に

(5)　刑場を含む戸外が“闇”に覆われるということは一般的には想定され難い。

(6)　著者の生活圏における慣習において、一日の時刻は朝6時頃より数えられ始め、ほぼ一時間ずつ「第一時」「第二時」と数える。

文芸的手法としてもイエスの死を極めて劇的に浮き立たせる効果を持つ。しかし、この描写が単に物語の効果をより劇的なものとするための虚構なのか、或いはその時特異な自然現象が起こったという事実の報告なのか、若しくはイエスの死に対する解釈、意味付けを含ませるためのものなのかについて検討すべきである。

従来この記述について、何らかの自然現象或いは奇跡の描写、または旧約聖書の終末論的表象若しくはヘレニズム世界においてしばしば著名な人物の死と結びつけて用いられる比喩表現等様々な可能性について論じられてきた。マルコ及びマタイ福音書著者は通常、彼らが事実 / 真理とみなしたものに対して時の表象を付与することが知られている故 (7)、ここで両著者が真昼の“闇”を事実即ち自然現象そのものの描写として描いた可能性も完全に排除されはしない。これらについて、マルコ、マタイ、ルカ其々の記述に沿って以下に要約しつつ論ずる。

(2) マルコにおける“闇”の描写

マルコにおいて、第六刻にイエスが十字架に付けられて後の三時間の時の経過は、通行人、祭司長たち、共に十字架に付けられた者による嘲笑の描写によって完成される。誰一人イエスに憐れみをかける者もいない中、真昼に全地が“闇”に落ちる。“闇”がイエスの死の瞬間、即ちイエスが諦めの叫びを上げる第九刻まで広がっていたと強調される（15:34,37）(8)。このように、“闇”はイエスの死を記述する物語のクライマックス、即ちイエスの十字架上の死を描く場面の描写に不可欠なものとして付随する。

これに先立つ部分には、旧約聖書の「苦難の僕」、特に『詩編』（22:28）のその描写を反映した「イエスの嘲弄」の場面が描かれており、“闇”に続く“イエスの叫び”は『詩編』22 冒頭句（22:2）の引用である。また、イエスに酢を差し出すために走り寄る何者かによるその叫び声に対する反応の描写も『詩編』69 (9) を完成させる句（69:22）である。これらからマルコの当該文脈は、この

(7)　R.E.Brown, *The Death of the Messiah, Doubleday*, 1994 1034

(8)　マルコは“闇”をイエスの死以前に終わったとして描いていると指摘する研究者もある。

(9)　「人はわたしに苦いものを食べさせようとし、渇くわたしに酢を飲ませようとします。」（PS69:22）新共同訳聖書参照。

通常ではあり得ない“闇”に関して、読者が旧約聖書の背景を想起するよう導くための編集節として配置されていることが想定される。

では旧約聖書との関連付けによって描かれる“闇”は、ここでイエスの死に対してどのような解釈を付与するものなのか。旧約の文脈を更に広範に想起しつつ、この“闇”によるイエスの死への意味付けについて考えてみたい。

先に記した詩編に先立ち、旧約聖書においては何をおいても第一に、『創世記』冒頭部（Gen1:2）に神の世界／人間創造以前の「混沌の“闇”」[10]の記述がある。次いで『出エジプト記』に、エジプトにおける災厄の一つとして三日間に及ぶ「国中に及ぶ“闇”」（Exod10:21-23）[11]の報告が現れる。この“闇”はモーセによってエジプト人への神の罰として告知されるものだが、これはユダヤ人を救済する神が「過越」という奇跡を起こす直前、即ち神による救いの業を実行する直前にエジプトに生じさせた“闇”として描かれている。これらを考慮に入れると本稿において扱われるテクストの“闇”は、イエスの死を旧約聖書の文脈に語られる神による救済の業に連続するものと位置付けた上で、その直前に生じる“闇”として、上述の旧約に表れる典型的な“闇”とパラレルに描かれているものと想定される。

旧約聖書においては、その他の箇所でも例えば『エレミア書』（Jer15:9）におけるエルサレムへの辛辣な非難の中で神が、神の罰を象徴する“闇”について「太陽が真昼に沈む。彼女は恥じ入り、名を汚される」[12]と語ったと記され、『知恵の書』においても「神の子であることを疑いながら唯一なる者を嘲る者が叫ぶ「私達は真理から逸れてしまった。そして正義の光は私達のために輝か

(10)「(1:1) はじめに神は天と地を創造した。(2) 地は空漠として闇が混沌の海の表にあり、神の霊がその水の面に働きかけていた。」旧約聖書翻訳委員会訳、「旧約聖書Ⅰ律法」岩波書店 2004 より引用。

(11) (10:21) ヤハウェはモーセに言った、「手を天に向かって伸ばせ。するとエジプトの地に闇が生じる。人が闇に触れることができる〔ほどの〕。(10:22) モーセは手を天に向けて延ばした。すると三日間エジプト全土が真っ暗闇になった。(10:23) 人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立ち上がることもできなかった。〔しかし〕すべてのイスラエルの子らには、彼らの住んでいるところで、光があった。」前掲書より引用。

(12)「(15:9) 太陽は日盛りに沈み彼女はうろたえ、絶望する。わたしは敵の前で民の残りの者を剣に渡すと主は言われる。」日本聖書協会「新共同訳聖書」1987 より引用。

ず“太陽は私達の上に昇らない”。」」（Wis5:6）[13]という記述が見られる。また、先の『エレミヤ書』の後の箇所（Jer33:19-21）には[14]、「昼と夜とが最早自然の運行に従わないなら、神が契約を破棄しようとしている徴である。」との記述がみられ、更に『ゼファニヤ書』において、「主の日」は「審判と裁きの日、即ち、「神の怒り」…”闇と薄暗やみ”（Zeph1:15）[15]として知覚されると記される。また『ヨエル書』（Joe2:2[16]、2:10、3:4）[17]にも“闇と薄暗闇の日”、“太陽は闇に変わり…主の偉大で恐るべき日の到来の時”との記述が現れる。加えて『アモス書』（8:9-10）[18]には「その日には、主は言う。太陽は昼間に沈むだろう。光は暗闇になり、そして日中に地上は闇くされるであろう…私はただ一人の息子のために嘆き、彼らの日を終わりとするであろう。」との記述がある。このように旧約聖書においては、神による人類の救済との関連の中で、「救いがもたらされない状況」或いは「救いがもたらされる直前の状況」若しくは「裁き」を指す表象としてしばしば或いは当然の如く“闇”が描かれることが確かめられる。

これらから、マルコはこれら旧約の記述を熟知して参照しつつ、イエスの死の直前の“闇”を描いたと想定される。即ち、マルコはイエスの刑死を神の救

（13）「（5:6）我々はまことの道を踏み外した。義の光は我々の上に輝かず、太陽も我々のためには昇らなかった。」「新共同訳聖書」より引用。

（14）「（33:19）主の言葉がエレミヤに臨んだ。（33:20）「主はこう言われる。わたしが昼と結んだ契約、夜と結んだ契約を、お前たちが破棄して、昼と夜とがその時に従って巡るのを妨げることができないように、（33:21）わたしが、わが僕ダビデと結んだ契約が破棄され、ダビデの王位を継ぐ嫡子がなくなり、また、わたしに仕えるレビ人である祭司との契約が破棄されることもない。」この箇所はXLLにはない。前掲書より引用。

（15）「（1:15）1:15 安穏にしている諸国の民に対して激しく怒る。わたしはわずかに怒っただけだが／彼らはそれに乗じて災いをもたらした。」前掲書より引用。

（16）「（2:10）2:10 その前に、地はおののき、天は震える。太陽も月も暗くなり、星も光を失う。」前掲書より引用。

（17）「（3:4）3:4 主の日、大いなる恐るべき日が来る前に／太陽は闇に、月は血に変わる。」前掲書より引用。

（18）「（8:9）8:9 その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ／白昼に大地を闇とする。（8:10）わたしはお前たちの祭りを悲しみに／喜びの歌をことごとく嘆きの歌に変え／どの腰にも粗布をまとわせ／どの頭の髪の毛もそり落とさせ／独り子を亡くしたような悲しみを与え／その最期を苦悩に満ちた日とする。」前掲書より引用。

済の出来事と解釈し、その死の直前の箇所に、混沌とした若しくは禍や罪科に満ちたこの世に対する神の警告及び裁きとしての“闇”の表象を編集したと考えられる。言い換えれば、イエスの死の場面の直前に“闇”を描くことによって、旧約の伝統に慣れ親しんだ読者にイエスの死を神の救済の出来事と理解させる目的を計った。即ちマルコは旧約聖書を手引き書として、イエスの死を神の救いの出来事と解釈したということが明らかであるといえる。

ところで、ここで「闇が全地を覆い」とある箇所のギリシア語「地（γῆ）」という名詞は字義上「地上／地球」、「国」のいずれをも意味することから、マルコがここで地上／地球全体に“闇”が及んだとしているのか或いはユダヤの地のみに“闇”が及んだ[19]としているのかという点についての議論もなされる[20]。研究者の中には後者の方が自然であると考える者が多数である。その理由は、イエスの死の時に世界全体に三時間の間“闇”が及んだとするならば、古代の歴史書若しくは天文学上の記録の少なくともいずれかにその報告が留められている筈だが、そのような記録は何処にも見当たらないからであるとされる。しかしながらそのような史的反論は、この箇所が上述のようにイエスの死に対する解釈が施された記述場面であることを考慮するなら適切ではないと考えられる。旧約における「主の審判の日」について、それが行われるのは通常イスラエル若しくはユダヤと考えられていたとしても、イスラエルに登場した歴代の預言者達は地上の或る小さな一画に黙示的徴を限定することは殆どなかったことを踏まえ、またマルコで物語中に間もなく登場するローマ兵士が、イエスを「ほんとうに、この人間こそ、神の子だった」と証言（Mk15:39）することと関連づけて考えると、マルコはイエスの死という出来事を全ての人々及び全世界[21]のための救いとして描出しているに相違ないと想定され、そこで用いられるこの「地（γῆ）」という単語も必然的に、ユダヤの地のみでなく広く少なくともマルコが想定した全世界を指していると理解されるのが妥当といえる。

上述した内容に基づいて、マルコにおける“闇”の描写は、マルコが「イエ

(19)　『ペテロによる福音書』ではユダヤの土地に闇が及んだと理解されている。

(20)　世界に闇が及んだとの解釈を採る研究者としてGnilka、Grayston、Lohse他が挙げられる。他方、ユダヤの地に闇が及んだとの説を採る研究者としてErasmus、Luther、Ewald、Klostermann、Knabenbauer、Olhausen、Plummer他が挙げられる。

(21)　少なくともローマ帝国全域を含む。

スの死」という悲惨な出来事を、旧約聖書の文脈を手掛かりとしつつ、なお広く世界に渡る神の救済の出来事と解釈し、読者にイエスの死と共に「神の審判」次いで「神による救済の業」が遂行されると、自然な形でかつ明確に悟らせるためのものであると想定される。

(3) マタイにおける“闇”の描写

ここでは、マタイ（27:45）における“闇”の表象について確認する。ここで著者はマルコに比してより滑らかなギリシア語を用いてはいるものの、内容は密接にマルコに沿っている。しかし、闇の到来を表現する際に用いられたギリシア語の時制は異なっており、マルコが現在形を用いたのに対してマタイは未来形を用いている。この相違に関して、未来時制を用いることを通してマタイはここで、マルコにおいても示唆されていた終末論的メッセージを更に強調しているということが推測される。

また、時制の相違以外の点についてもマタイの文脈はマルコのそれに比べて一層特徴的であり、マルコにおいて単に象徴的終末論的メッセージであったものが更に強調されたものとなっているといえる[(22)]。何故なら、マタイはここで「地震」、「墓が開く」、「死者の蘇り」等の終末論的表象を多用しているからである。これらの表象は、“闇”の描写と良く適合するともいえる。これらを通してマタイはイエスの死を、マルコにおける「神殿の幕が裂ける」という叙述のみに拠るよりも更に一層劇的かつ可視的な形で終末論的告知として記しているといえる。

しかしながら、この箇所でマタイが終末論的表象を多用しているこのことから、マタイにおける「全地（γῆ）」という単語は、マルコにおけるように世界全体を指すのではなくユダヤの地のみを意味しているのではないかとの捉え方がしばしばなされてきた。しかし、マタイは特定の地理的場所を指す時、他の箇所では「全」を指すギリシア語として ὅλος を用いるのが通常だが、ここではこれに相当するギリシア語として、むしろマルコ、ルカが ὅλος を用いているのに対して唯一マタイのみが πᾶς を用いている。このことから、“闇”の及ぶ場としてマタイもここでやはり特定の地理的場所というよりもむしろ概念

(22) マタイにおいてのみ「全ての［ユダヤの］人々」がピラートゥスの前でイエスに十字架刑による死刑を定めた責任を受け入れる（27:25）。そこから、神が“闇”を切迫した審判の警告として送ることが予期される。

としての世界全体を射程としているのであろうことが推測される。また、「全地 γῆ の上に」という表現は、『70 人訳（LXX）』（旧約聖書のギリシア語訳）[23] において用いられる語法でもあることから、マタイも当然のことながらここで“闇”に関する旧約の文脈を強調しているものと考えられる[24]。

これらのことから、マタイはその大半がユダヤ人改宗者であるとされる彼の読者に向けて、敢えて多くのユダヤにおける終末論的表象を絡めつつ、マルコと同様にイエスの死の直前の“闇”を、イエスの死と共に「神の審判」「救済の業」が成就することの前触れとして明確に悟らせる工夫を一層凝らししつつ、また「イエスの死の出来事」を世界全体に及ぶ神の救済の業と解釈して伝達していると考えられる。

(4) ルカにおける“闇”の描写

ルカ（23:44-45）はここで、マルコの描写「イエスの死の前の“闇”」（15:33）と「イエスの死後“神殿の幕が裂ける”こと」（15:38）の位置の書き換えを行っている。ルカにおいても“闇”は第六刻頃から第九刻まで時刻付けられるが、“闇”と“イエスの臨終の叫び”との間に「神殿の幕が避ける」というエピソードの挿入が行われている[25]。この再配置は恐らく、ルカの整然とした記述（1:3）を好む嗜好を反映したものであると同時に、これら二つの徴が神の怒りを象徴するものであるということに焦点が当てられ提示されているものと想定される[26]。またルカは、すぐ後の箇所でイエスの神に対する「私の霊を委ねます」との言葉を叙述するが、そこをクライマックスとするために、その言葉の前に否定的描写を集中させることを意図したものとも想定され（23:46）る[27]。このような同一の要素の集中化も整然とした記述を好むルカの編集方針に叶うもの

(23)　旧約聖書のギリシア語訳。

(24)　特に『出エジプト記』（10:22）に現れる“闇を”指しているものと考えられる。「（10:22）モーセは手を天に向けて伸ばした。すると三日間はエジプト全土が真っ暗になった。」前掲書。

(25)　これは太陽の光の消滅を連想させるものでもある。

(26)　ルカはマルコの文脈上の“闇”と「イエスの死」とのつながりを分解し、“闇”の表象を中心に置いているとも想定出来るが、上述の想定の方がルカの手法に照らして自然と考えられる。

(27)　ルカの文脈においてイエスの神への信頼の行為に続くあらゆるものはポジティブに、神の慈しみの認証として描かれる。

といえる。

ルカによるマルコの二つの場面の再配置についてはこのように合理的に理解し得るが、他方でその語彙に関しては若干の疑問が残される。というのは、この箇所のルカ（23:44）の殆ど全ての叙述はマルコ（15:33）からの借用で、用いられる 16 単語のうち 12 単語がマルコの語彙そのままであり、語彙の幾つかは通常のルカのスタイルとは異なるものだからである[28]。例えば、通常マルコが“そして（καὶ）”という単語を過剰に用いることが知られているが、ここではルカが二番目の“そして（καὶ）”という単語を自ら書き加え、ルカのここでの文脈に語調の調和を計っている。更に、ルカはここに“既に（ἤδη）”という単語を付加し[29]、またルカに特徴的な表現でもある（9:28、22:59、『使徒言行録』10:3 等）時刻を表す“頃（ὡσεὶ）”という単語も加えている。これらについて、フェルドケンパー（Feldkämper）はかつて、ルカは日中の“闇”のような終末論的象徴に正確な時刻を割り当てることが出来なかったのではないかとの疑念を露わにしたが[30]、そのような断定が適切かという点については考慮の余地がある。

なお、ルカのこの次の部分の描写に記される「太陽が光を失ったのである」（23:44）という箇所の写本には以下のような二つの異読が存在しているので、二つの異読とその訳について述べる。

① τοῦ ἡλίου ἐκλιπόντος

アオリスト（場合により ἐκλιπόντος）絶対分詞構文。

この読みは、P^{75}、ヴァティカン写本、シナイ写本、エフライム写本他の写本に見られ、訳として次の二種類が提示される。（下線 / 波線は著者による）

（a）太陽が消滅していたので / 時 / 後

（b）太陽が沈んだので / 時 / 後

ἐκλιπόντος の訳の可能性は上記下線部のように二種類ある。また、分子構文は副文として任意の接続詞で主文へ繋げることが可能である故、主文への接続語としては波線他の訳が可能である。

（28）　ここで ルカはマルコから“全地に ἐφ᾽ ὅλην τὴν γῆν”という表現を借用している。他の箇所（4:25、21:35）ではルカは ἐπὶ πᾶσαν τὴν γῆν というギリシア語を好む。

（29）　ここから読者はイエスが第六刻（正午）前に十字架に付けられていたと推測するように導かれ、マルコの時刻との暗黙の調和が見出される。

（30）　Betend 273

② καὶ εοκοτισθη ὁ ηλιος

主文。この読みは、アレクサンドリア写本、ベザ写本、コリディティ写本、マルキオン写本、ラテン語及びシリア語による諸証言、コイネー伝承他の写本にみられる。

訳は次の通りである。

(c) そして太陽が暗くされた / 覆われた（下線は筆者）

この箇所の写本上の異読と訳に関して、従来提示されてきた諸説について以下に記す。

本来、イエスの死の時刻の太陽の消滅の記述については当然のことながら天文学上の疑問が付随する故、この点について初期の釈義家達は、後の箇所で言及するオリゲネスの影響によって概ね二番目の写本上の読みを好んできたが、前世紀のティッシェンドルフ（Tischendorf）以降、現代の釈義家においては最初の写本の読みも同様に好まれている。

しかし、前者の写本の読みを採用する場合、それがどのように訳されるべきかという問題が残される。“沈む、消える、消滅する”が ἐκλειπειν の通常の訳語である故、上記（a）（b）の二つの訳の可能性のうち、特に（b）の翻訳は言語上及び意味上の問題がなく、多くの現代のルカ研究者は、ラグランジュ(Lagrange)、マーシャル（Marshall)、フィッツマイヤー（Fitzmyer）他に見られるようにこちらの訳を好む。この訳を採用すれば、この箇所の“闇”の記述の説明は平凡なものとはなるものの、過越祭が始まる頃の満月の折に太陽の消滅が起こることはあり得ないという知識をルカが持ち合わせなかったのではないかという疑念を払うことは可能となる。この考え方は既に言及した4世紀の教父オリゲネスによって提示されたもので[31]、彼に拠れば「太陽が消滅したというアイディアは、反キリスト者によって、福音書の信頼性を失随させるために導入されたものである」と考えられた。また、太陽の消滅の最長の長さは7分40秒であるとのデータが存在し[32]、これは共観福音書に記述された長さよりも相当に短いし、更に尋常ならざる出来事について報告を欠かさないルカと前後するセネカやプリニウス等の同時代の著述家達がこのような出来事について何も記していないことについても疑問が残される。

(31)　Commentariorum Sries 134 ; In Matt.27:45[GCS38.271-74]）参照。

(32)　Driver,“Two”333 参照。

イエスの死の時に太陽の消滅が起こらなかったのだとすれば、他に考えられる現象は、後者の写本の読みに基づいた(c)の訳にあるように、太陽が“暗くなった”若しくは“覆われた”等の一般的な何等かの出来事であったのではないかと想定される。太陽の消滅と共に起こる月の消滅については、後の時代のスカリンガー（J.Scalinger）（1598）やカルメ（A.Calmet）（1725）等による報告もあるので、これらの情報及び『使徒言行録』（2:20）の「太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる」というルカの記述に基づいて、ハンプレイ（Hamphreys）やワッディントン（Waddington）[33]等は、ルカが通常に起こり得る砂嵐と A.D.33 年 4 月 3 日に起こった部分月食とをこの箇所に合成して編集しているものと想定する。この他にもこの記述及び訳語について、太陽の黒点、暴風雨、雷雨、灰の嵐を引き起こすシロッコ、激しい雷雨、アラビア若しくはシリアの火山噴火の余波等多くの説が提示されてきたが、ここでのルカの記述には『使徒言行録』(2:2)[34]のような嵐や風などの言及がなく[35]、パレスチナに生活しその地方の天候を知る人なら持ち合わせるような、例えば後の時代にこの辺りの地域に生きたヒエロニムスが 396 年の聖霊降臨節の頃に生じた通常にない“闇”について言及する[36]ような気象についても何の表現もされていない。

この箇所に対して、科学的に適切とは考えられない（a）の訳「太陽が消滅していた」を採用することを支持する釈義家も存在する[37]。この訳に関してキラーマン（Killermann）は、恐らくルカが過越の季節に日食は起こり得ないということを知らなかった故ではないかと考える[38]。しかし他方で、ツキディデースが新月の時期に生じた日食について唯一の出来事として報告している事例が存在するし[39]、日食についての他の古代の著述家による報告も通常、B.C.364 の日食についてプルタルコスが「闇が日中に街を覆った」と描写した

（33） Dating

（34） 「すると突然、烈風吹きすさぶがごとき音響が天から湧き起こって、彼らが座っていた家全体を満たした。」

（35） 「すると突然、烈風吹きすさぶがごとき音響が天から湧き起こって、彼らが座っていた家全体を満たした。」（使徒言行録 2:2）参照。

（36） Contra Ioannem Hierosolymitanum 42 [PL 23.393C] 参照。

（37） ヨハネス・クリソストモス、アレクサンドリアのキュリロス等。

（38） Finsternis

（39） Thucydides, History 2.28。

ように[40]相当に誇張されるものであるから[41]、イエスの死（A.D.30 か 33）の前後 1、2 年の間にこの地方に実際に日食が起こり、ルカがそれについて知っていたものを、日付を混同し[42]なおかつ誇張して記したということも想定されてよいといえる。実際、1 分半続く日食が A.D.29 年の 11 月 24 日にギリシア、小アジア、シリアの一部で起こったことが知られており、ソイヤー（Sawyer）は、ルカがこれをアンティオキアで経験していたとの仮説を立てる[43]。しかし、このような仮説はルカの翻訳及び創作についての問題を複雑にするのみであるともいえる。というのは、この日食は秋に起こったものであり、イエスの十字架刑は春の出来事だからである。いずれにせよ、このようにルカの訳に関連付けがなされ得るティベリウス帝治世（A.D.14–37）に起こった日食については、日付はまちまちであるものの幾つかの記録が記されている。その中には、オリゲネスによる報告[44]の他に、歴史家エウセビオスによってその日付がティベリウス治世第 18–19 年（A.D.31–32 年）とされ[45]、ビスニアの地震及びニケイアの建造物倒壊及びヨセフスに報告されるエルサレム神殿の崩壊と関連付けられたものもある。

上記については研究者による多くの仮説にも拘わらず決定的な推定はなされ

(40)　Peropidas31 2

(41)　ソイヤー（Sawyer）は、1176 年にアンティオキアで起こった 3 分 20 秒続いた日食が、「太陽は完全に覆われた。夜がやって来て星が現れた。闇は 2 時間続いた。その後、光が戻ってきた。」と記される事例について報告している。Why 128 参照。

(42)　「幼年物語」においてルカは、「さて、その頃、カエサル・アウグストゥスから、全世界の戸口調査をせよとの勅令が出た」（2:1）と記すが、アウグストゥスは多くの勅令を出し多くの地域的な戸口調査を行いはしたが、史的資料に証拠を求める限りそのような全世界の戸口調査は存在しない。またルカは、イエスの「幼年物語」のこの記述をイエスのベツレヘムでの誕生の背景として描き、2:2 で「この戸口調査は、クリニウスがシリア [州] の総督であった時に施行された、最初のものであった。」と記して、物語中でイエスの両親をガリラヤからベトレヘムへと向かわせているが、この記述に関してもシリア総督の下での戸口調査はあったものの、ガリラヤではなくユダヤにおいてのものであったし、更にそれはイエスの誕生年として最も蓋然性の高い日付から 10 年以上後のことであったことが知られている。このような日付上矛盾する記述がルカにおいては当該箇所以外にも存在する。

(43)　Why127

(44)　Contra Celsum2.33

(45)　GCS [2d ed.47.174–75] 参照。その他関連付けが可能な日食の日付としては、A.D.32 年 7 月 1 日から A.D.33 年の 6 月 30 日迄に起こったとして報告されたものがある。

ないが、他方で以下に記すルカの他の箇所の記述から、ルカがマルコと同様に“闇”を旧約における最後の時に生じる終末論的徴の一つとして捉えていたということも確認される。例えばルカは『使徒言行録』（2:17-21）において次のように記している。

「（17）神が言われる。－終わりの日々に、私の霊をすべての人に注ぐであろう。すると、あなたたちの息子たちと、あなたたちの娘たちとは預言し、あなたたちの若者たちは幻を見、あなたたちの老人たちは夢を見るであろう。（18）私の僕たちと私のはしためたちとにも、その日々には、私の霊を注ぐであろう。すると彼らは預言するであろう。（19）また、上では天に奇跡を、下では地に徴を示すであろう、すなわち、血と火と立ち昇る煙とを。（20）主の大いなる輝かしい日が来る前に、日は闇に、月は血に変わるであろう。（21）そして、主の名を呼ぶ者はすべて救われるであろう。」（下線は筆者による）

また「幼少物語」（1:78-79）においてイエスについて次のように描いている。

「（78）〔これは〕われらの神の恵みの断腸の想いのゆえ。その想いのうちに、高きところより黎明の光がわれらを訪れ、（79）闇黒と死の陰とに座する者らに光輝き、われらの足〔どり〕を平安の道へと直に導く。」（下線は筆者による）

更に、福音書記者の中で実はルカのみが受難物語のイエスの死の場面に先立つ箇所（22:53）で次のように“闇”の表象を用いている。

「私は日々、神殿［境内］でお前たちと共にいたが、お前たちは私に手をかけはしなかった。しかし今はお前たちの時、闇の支配だ。」（下線は筆者による）

上述関連部の記述から、ヘレニズム・ローマ世界において非ユダヤ人読者に向けて成立したルカ福音書においても、マルコと同様の終末論的意味付けが伝えられていることが認められる。しかしながらルカは、このような旧約の背景を超えまたマルコやマタイに明確な終末論的モティーフを超えた“闇”の表象をこれらに重ねているのではないか。以下において更にルカによるイエスの死の場面の“闇”の意味づけについて想定を試みる。

『使徒言行録』（1:8）に見られるように[46]、ルカが“全地”（23:44）という単語によって表すものはローマ帝国であると考えられることからすると、イエスの死の場面において日中に起こった“闇”は“ローマ帝国の死”を暗示すると

（46）「しかし、聖霊があなたたちに降るとき、あなたたちは力を受けるであろう。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらには地の果てに至るまで、私の証人となるであろう。」（Act1:8）引用内エルサレム…至るまでのギリシア語は以下の通り。[ἐν] πάσῃ Ἰουδαίᾳ καὶ Σαμαρείᾳ ἕως ἐσχάτου τῆς γῆς　下線は筆者による。

想定することが出来る。これに関連して、ルカは「誕生物語」（2:1）でイエスの誕生を「カエサル・アウグストゥスから、全世界の戸口調査をせよとの勅令が出た」という出来事に関連付けることによって、その誕生に普遍的な意味合いを与えていたことを想起すると、そこから、ルカはそれとパラレルな描き方をイエスの死においても行っていると想定することが可能である。

次に、旧約に描かれる“主の日”（世の終末）の表象を理解するためのバックグラウンドを僅かしか持たないヘレニズム・ローマ世界に生きたルカの読者がどのようにして“闇”、“日食”、“神殿のヴェールが裂ける”等の描写を理解することが出来たのかという点について考えてみたい。

本来、ヘレニズム・ローマ世界には、ユダヤとは異なる文脈のもとに、半神的な偉大なる人物の死の際に尋常でない自然現象が生じることが描かれた豊富な文献上の事例が見出される。これに対しては、関連する 25 人のヘレニズム・ローマの著者による三十数箇所の描写が確認される[47]、また後期ラビ文学にもこれらのパラレルが見出されることから、このような語りのパターンが当該世界において一般的なものであったと認められる。仮にイエスの死前後 100 年間の著者に限定しても、プルタルコス[48]がロムルスの死に際して「太陽の光が消滅した」と記しているし[49]、オウィディウスは「太陽が消え失せた」という表現を用いている[50]。また、キケロは「太陽が…消えたように見えた」と記している[51]。更に、ユリウス・カエサルが死んだ際にもプルタルコスは「太陽が暗くなった」と記述し[52]、ヨセフスは「それは太陽が消えた時であった」と書き留めている[53]。同様にオウィディウスはその時の描写に「太陽の悲しむ顔」という表現を用い[54]、ウィルギリウスは「太陽がその輝く頭を隠した」と記している[55]。またプリニウスはこの死について、「独裁者である皇帝が殺された

（47）　Grandez“Tinieblas 199–200
（48）　Romlus 27.6
（49）　Plutarch, Romulus 27.6
（50）　Ovid, Fasti 2.493
（51）　De re publica 6.22
（52）　Caesar 69.4
（53）　Ant.14.12.3;No.309
（54）　Metamorphoses 15.785
（55）　Georgics 1.467

時のような強力で長い日食」という表現を用いて描いている[56]。

上述の例から、ルカにおいてイエスの死の場面の“闇”は、旧約の背景を受容しつつも、そこにその文脈を超えたヘレニズム・ローマ世界の更なる背景、即ち、偉人の死と結び付けられる尋常ならざる自然現象という枠組みを重ねて描かれていると想定される。またルカにおいてイエスの死の場面は、「誕生物語」及び「幼年物語」とパラレルに、より広範な物語構成上のまたヘレニズム・ローマ世界の表象を用いた枠組みの中で、当該地域の人に対する伝達の意図を持って人ならぬ特別なる存在として解釈され編集されていることが明白であるといえる。

(5) 共観福音書における“闇”の表象の意味

上記に認められたように、共観福音書における“闇”の表象は、自然現象の類を記述したものとは全く想定されず、イエスの死の出来事の意味を象徴的に表現するために編集されたもの、キリスト教の用語を用いれば神学的意味付けによって記されたものと考えられる。この意味付けに関しては、マルコが旧約を下書きとして“闇”を、神の審判、救いの到来の前座として起こるものとして描いたのに続いて、マタイがこれに更なるユダヤ的終末論的表象を加えて強調した形で表現し、ヘレニズムの素養を持つ著者による非ユダヤ人読者へと向けられた福音書であるルカにおいては、ヘレニズム世界に頻繁に語り継がれた偉大なる人物の死と尋常ならざる自然現象の結び付けという伝統を下敷きとしながら、マルコの“闇”の表象が改めて解釈しなおされているとみなされる。

このようにして、共観福音書における“闇”の表象は福音書読者にとって、イエスの死という出来事に対する意味づけの軌跡を告げるものであり、イエスの死が解釈された過程を示す指標となる記述であることが確かめられたといえる。

4．イエスの最後の叫び

ここでは、死の場面におけるイエスの“叫び”に焦点を当てて再度、共観福音書記者によりイエスの死がどのような意味づけの過程を辿っているのかという点について考えてみたい。

(56)　Natural History 2.30;No.97

Mk 15:34	καὶ τῇ ἐνάτῃ ὥρᾳ ἐβόησεν ὁ Ἰησοῦς φωνῇ μεγάλῃ ελωϊ ελωϊ λεμα σαβαχθανι ; ὅ ἐστιν μεθερμηνευόμενον ὁ θεός μου ὁ θεός μου , εἰς τί ἐγκατέλιπές με ; そして第九刻に、イエスは大声で叫んだ、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」。これは訳せば、わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのか、という意味である。
Mt 27:46	περὶ δὲ τὴν ἐνάτην ὥραν ἀνεβόησεν ὁ Ἰησοῦς φωνῇ μεγάλῃ λέγων ηλι ηλι λεμα σαβαχθανι ; τοῦτ᾽ ἔστιν Θεέ μου Θεέ μου, ἱνατί με ἐγκατέλιπές ; また、第九刻頃に、イエスは大声を上げて叫び、言った、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。これは、わが神よ、わが神よ、なぜ私をお見捨てになったのか、という意味である。
Lk 23:46	καὶ φωνήσας φωνῇ μεγάλῃ ὁ Ἰησοῦς εἶπεν πάτερ, εἰς χεῖράς σου παρατίθεμαι τὸ πνεῦμά μου. τοῦτο δὲ εἰπὼν ἐξέπνευσεν するとイエスは、大声を上げて言った、「父よ、あなたの両手に、私の霊を委ねます」。そしてこれを言った後、彼は生き絶えた。

（1）共観福音書におけるイエスの“最後の絶び”の記述

上記に見られるように、共観福音書の各記述においてイエスは死の瞬間に絶叫するが、その言葉はそれぞれの福音書において多少異なっている。その中で、マルコ／マタイは相互の単語に相異があるもののほぼ同一の内容を示し、ルカがこれに異なる。

この点に関して、ルカはマルコによるイエスの絶叫を独自の編集方針に基づいてソフトなものとし、マルコが用いる『詩編』22の句を『詩編』（31:6）の句「（まことの神、主よ、御手にわたしの霊を委ねます。（わたしを贖ってください。）」によって書き換えている[57]。これは、イエスの最後の叫びが後の時代の多くのキリスト教徒にとってそうであったのと同様に、ルカにとっても理解困難であった若しくは相応しくないものと判断されたことの一つの証左といえる。

ここでは、原初のマルコに次いでマルコをそのまま受容したマタイにおけるイエスの叫びの記述に焦点を当て、その記述が意味するところ、即ち、イエスと共に歩みつつその死後に残された者達がどのようにイエスの死を捉え、また

（57）　この点について、R.E.Brown, 前掲書 1066-1069；田川『新約聖書訳と註 2 ルカ福音書』作品社、2008、489 等参照。

受容したのかという点について考えてみたい。なお、マルコ / マタイの言語には相違があるが、それは以下の通りである。

マルコにおいて、イエスは第九刻（午後３時）に大声で「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫んだと記され、マタイにおいては同時刻頃に「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫んだと記される。この言葉上の相異については近年既にほぼ定説があり、前者がイエスが生前用いたヘブライ語の方言であるアラム語、後者がヘブライ語によって記されていることによるものであるとの理解が共有されている。またこの言葉は、マルコが『詩編』22 篇の冒頭句の引用をイエスの最後の叫びとしてアラム語で記したものに、アラム語を介さない読者のために、これは訳せば、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのか」という意味であるという訳を添えたのに次いでマタイもマルコのこの書き方に従って訳を付加している。以下にこの箇所の“イエスの叫び”について考える。

マルコの報告に拠れば、この後イエスは更にもう一度大声を出して息を引き取った、即ちイエスの最後はいずれにせよ絶叫を持って終わったと記述されている。上記に引用した通り、マタイもこの部分について全面的にマルコの内容に従っている。

ここに記されたイエスの最後の叫びの記述については、古くから、キリスト教において神の子と信仰されるイエスの死に方として一見して望ましいとはいえないもの、むしろ受け入れ難いものという印象を一般に与え、それ故この箇所について、言い換えればこのようなイエスの死に様の記録についてどのように捉えられるべきかということが議論されてきた。

この点に関してかつて E. シュタウファー（E.Stauffer）は、イエスは元々過越祭に死のうと決意しており、『詩編』22 篇の冒頭句の引用は、そのイエスの神に対する揺らぎない信頼を表明するためのものであると解釈した。また、M. ディベリウス（M.Dibelius）、G. ボルンカム（G.Bornkamm）等はシュタウファーと同様にこれを、イエスがその最期の時に神の意志との一致のうちに在り続けたものと解釈した。これらは伝統的キリスト教神学における保守的立場による主たる解釈だが、他方、田川健三、青野太潮等は、これを文字通りイエスの断末魔の絶望が表現された記述と解釈する。また八木誠一は、光明な禅僧が最期におよび「死にとうない、死にとうない」と弟子達を困惑させたという逸話を

イエスの最期の叫びと対比して理解することを試みる[58]。

これらに対して大貫隆は、この叫びに関して、田川、青野の解釈線上に立ちながらも多少意味合いを異にしつつ、これは文字通り死に際してのイエスの神への「懸命な問い」であったと解する。即ち、イエスはこの最後の時に「なぜ自分は、『神の国』の実現を見ることなく、かくも残虐な形で殺されなければならないのか」「俺は一体何だったのか」「俺の全ての働きは何のためだったのか」と全く理解し得なくなったのであり、それ故この絶叫は、自らがこれまで「神の国」について編み上げ、それに拠って自分の全ての言動を意味付けてきたイメージ・ネットワークが分裂してしまったことに対する必死の問いかけの叫びであったと解する[59]。言い換えれば、イエスは自分自身にとって意味不明の死を死んだ、さもなければ謎の殺害を受けたのだと捉えられる。言うなれば、歴史上の人物であるイエスにとってこの謎は解けないままで終わったのであり、今なおそのままで終わっている。そしてその謎は、彼自身においてではなく、彼の死後に残された弟子達において初めて解けることとなったのだとされる。即ち、残された者達には、イエスのこの叫びを聴きまた死に様に接して、この意味を解釈せざるを得ないという課題が残されたのだと解釈される。そしてこの課題への応答行為こそがキリスト教発祥の契機となったのだが、その契機は上記のイエスの最後の叫びそのものにやはり内包されていたといえる。

イエスの最期の叫びについては、現在でも研究者間で解釈の一致は見られない。しかしながら、E. シュタウファー等の説を採るにせよ大貫説を採るにせよ、この言葉にはイエスの生涯に対するイエス自身と残された者達による意味づけの契機が含まれている故、マルコ及びマタイ福音書記者は其々にその読者にむけてイエスの叫びを記し、また問いかけつつ同時に彼ら自身の解釈を提示してイエスの死をめぐる物語を終えたのだと想定される。

5．結語

以上、共観福音書におけるイエスの死の描写の中から特に、“闇”と“イエスの叫び”について言及してきた。

これにより、“闇”の記述についてマルコ・マタイ及びルカは、其々異なる

(58)　この言葉は臨済宗古月派の禅僧であり画家、仙厓義梵（1750-1837 年）の最後の言葉として知られる。

(59)　大貫、前掲書、214-215 参照

文脈 / 文化伝統から、いずれもイエスの死を神の救いが訪れる前の状態及び偉大なる人物の死に伴う超自然的徴として描いたことが確かめられた。この“闇”の表象を通してイエスの死は、残された者達の、福音書記者に至るまでのイエスの死に対する解釈と意味付けを経て、救いをもたらす出来事として解釈されるよう読者を導いている。同時にこれは、イエスの死に接した残された者達から共観福音書記者に至る迄のイエスの死への解釈の軌跡と結論そのものの端的表現ともいえる。

他方、イエスの叫びについては、諸説提示されつつも未決の問いであるといえる。しかしこの叫びは、残された者達及び全ての福音書読者への問いかけとして捉えられることが可能である。またこの問いかけは弟子達を経て読者に、弟子達が懸命に行った意味付けの後に達したのと同じ結論へと達するよう導く契機となる問いかけとしてあるといえる。イエスの出来事は、イエス当人の生涯とその結末のみによっては意味が不明のまま残されたが、残された者達の懸命なる意味づけの解釈行為によって新たなる次元における意味を成していった。その意味づけの解釈行為は、一人の歴史上の人物イエスを神の子と解釈し信仰するに至るダイナミズムを有し、やがて世界宗教、キリスト教の成立と展開へと発展していった。

このようにイエスの最期を語る物語は、イエスという一人の歴史上の人物を、残された者がどのように新たに認識し直し、またどのようにイエスの死の出来事を後の人々にとって意味あるものとしていったのかという軌跡が如実に読み取られる物語として編集されていることが、当該物語部の“闇”“イエスの叫び”の記述から特に確かめられるといえる。

－参考文献－

－Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece,26.neu bearbeitete Auflage deutsche Bibelgesehhschaft Stuttgart,1983

－Biblia Sacra Vulgata, Iuxta Vulgatam Versionem, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1994

－日本聖書協会『新共同訳聖書』1987

－新約聖書翻訳委員会『新約聖書福音書』岩波書店 1996

－佐藤研訳『ルカ文書』岩波書店　1995

－Bornkamm Günther,*Jesus von Nazareth, 15. Aufl. mit Literaturnachträgen*, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart Berlin Köln 1975

－Brown R.E., The Gospel according to John I/II（AB 29/29A）, New York 1966/70
－Bultmann, R., *Die Geschichte der synoptischen Tradition. Mit einem Nachwort von Gerd Theißen*, 10. Auflage, Vandenhoeck und Ruprecht, Göttingen 1995
－Dauer A., Das Wort des Gekreuzigen an seine Mutter und den ‘Junger den er liebte, BZ 11 NS（1967）
－Dibelius M, Die alttestamentlichen Motive in der Leidensgeschichte des Petrus und des Johannes-Evangeliums（1918）, in: BG I, 221-247
,Die Formgeschichte des Evangeliums, Tübingen^{2}1933 （^{6}1971 ）（FdE）
－GnilkaJ., *Das Evangelium nach Markus*（Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament Bd. 2）. Neukirchener Verlag, Neukirchen-Vluyn, 2002
, *Wie das Christentum entstand*. Herder, Freiburg/B. 2004
－Grandez, R.M., Las tinideblas en la muerte de Jesus. Historia de la exegesis de Le 23,44-45a（Mt27,45;Mc15,33）, EstBib47（1989）
－Jeremias, J., Perikopen -Umstellungen beom Lukas? NTS 4（1957-58）
－Killermann,S., Die Finsternis beim Tode Jesu, TG23（1941）
－Sawyer, J.F.A., Why is a Solar Eclipse Mentioned in the Passion Narrative（Luke xxiii44-45）?, JTS NS23（1972）
－Stauffer, E., Jesus, Gestalt und Geschichte, Bern 1957
－Trilling, W., Le Christ, roi crucifie. Lc 23,35-43, AsSeign 2d series, 65（1973）
－青野太潮『「十字架の神学」の成立』ヨルダン社、1989
－大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2003
－佐藤研『悲劇と福音』清水書院、2001
－堀和久『死にとうない 仙厓和尚伝』、新潮文庫、1996
－森本哲郎『この言葉！』、PHP 新書、2000
－八木誠一『新約思想の成立』岩波書店、2002